

〈自由投稿論文〉

バルカン戦争におけるオスマン帝国の内政と軍の動向

岩木 秀樹

はじめに

1912年から始まったバルカン戦争は、オスマン帝国にとって、歴史的転換点であった。オスマン主義を基調にした多民族多宗教国家から中東諸国体制へ、またトルコの観点ではトルコ主義によるトルコ共和国建国への画期と言えよう。

このような重要な歴史的意味があるオスマン帝国におけるバルカン戦争であるが、従来あまり扱われていなかった。オスマン帝国を国際政治上の主要なアクターと見て、その主体性を考察する必要がある。

本論文では、オスマン帝国における内政と軍及びその関係を研究することにより、戦争へと進んでいった状況と敗北要因、内政への影響とバルカン戦争の歴史的意味を考察するものである。

第1章ではバルカン戦争前のバルカン情勢を瞥見し、第2章では戦争前のオスマン帝国の好戦的雰囲気述べ、第3章では軍の動員の問題点を、第4章では外交交渉を考察し、第5章では大宰相府襲撃事件の要因を、第6章では戦争敗北の軍事的要因を指摘し、第7章ではバルカン戦争の歴史的意味をいくつかに分けて説明する。

1. バルカン戦争前のバルカン情勢

19世紀を通じて、バルカンの諸民族はオスマン帝国からの独立を達成して

いった。露土戦争のあと、ビスマルクの仲介により成立した1878年のベルリン条約によって、セルビア、モンテネグロ、ルーマニアの独立が達成され、ブルガリアは公国として自治が認められた。これらバルカン諸国はそれぞれ近代化を進め、これに伴い相互に軍事力の強化を競った。こうした情勢に加えてヨーロッパ列強の利害関心がからみ、バルカン地域は緊迫した事態が続いた（柴 1996：46）。

バルカンにおける勢力均衡は、1908年のいわゆる「青年トルコ人」革命により変化が見られた。革命の混乱に乗じて、ブルガリアは独立を宣言し、オーストリア＝ハンガリーは、ボスニア・ヘルツェゴビナを併合した（Kayah 1996：301）。この併合はロシアを強く刺激し、ロシアとオーストリア＝ハンガリーは、バルカンの地で政治的リーダーシップをめぐって鋭く対立した。またこの併合によりバルカン諸国は帝国主義に対する無力感と連帯の必要性を感じはじめ、1912年のバルカン同盟への道のきっかけともなった（*The Other Balkan Wars* 1993：4, Djordjevic 1981 = 1994：199）。

バルカン諸国はマケドニアをめぐり鋭く対立していた。ジョルジェヴィチによれば、この地は19世紀の80年代以降バルカン諸国において抗争の焦点ともいえる地域であった。バルカンのナショナリズム、列強の帝国主義など錯綜する内外の諸要因が複合的に作用して、マケドニア問題は生まれた（Djordjevic 1981 = 1994：180）。

ウナルによれば、バルカン同盟を最も積極的に推進したのはブルガリアであった。オスマン帝国の側もブルガリアに対しては強い警戒感を示し、ブルガリアとの戦争が不可避であるということは、すでに1908年のブルガリア独立宣言以来言われていた（Ünal 1998：150, 166）。バルカン同盟はロシアの扇動によるところが大きく（Kialy 1987：401）、フランスもそれが自国にとって有益であると判断していた（Ülman 1984-1985：286-288）。このようにして成立したバルカン同盟は、列強の双極的均衡を崩し、国際場裏に第三勢力を生み出した。1878年のベルリン会議の時とは異なり、バルカン諸国はもはや西欧国際体系の単なる客体ではなくなったのである（Miller 1969：45, 50）。

2. バルカン戦争期のデモ

従来の研究では、バルカン戦争や第一次大戦においてオスマン帝国は受動的な客体として、単にバルカン諸国や列強に対する応戦として描かれることが多く、主体的に戦争に進んでいく叙述が少なかった。また「三頭政治」などの言葉に象徴されるように、特定の個人のイニシアティブで戦争への道を進んだとの評価もしばしばなされている（Aksakal 2008 : 1, 11, 90）。しかし諸国によるオスマン帝国領土の蚕食という国際政治的側面やオスマン内政の側面、さらに帝国に広がる閉塞感と好戦的雰囲気から見ても、主体としての戦争遂行要因は存在する。多くの民衆を巻き込んで、戦争へ進んで行ったことを考えると、単なる客体ではなかったのである。

バルカン戦争が開始される前後、オスマン帝国においても戦争開始への好戦的雰囲気が漂っていた。学生らは戦争賛成、ベルリン条約23条に反対するとのスローガンを掲げて、デモを行った（Aktar 1990 : 90, 124）。1878年のベルリン条約23条には、クレタ島及びオスマン帝国ルメリー（ヨーロッパ部）における行政改革条項が書かれていて、この時期列強もバルカン諸国もこの地域の行政改革を迫っていた（入江 1964 : 166）。それに対して学生らは不満を募らせていた。

最も大規模な学生デモはバルカン情勢が緊迫して来た10月に入ってきてからであった。10月3日には、学生協会が朝からデモを行い、まず陸軍省に行った。そこで学生の代表は、ファット・パシャに対して、ここにいる学生は皆愛国心という同じ目的を追求している若者であり、私たちは宣戦布告を望んでいると主張した。その後ユルドズ宮殿に向かう途中で、キャミル・パシャと陸相のナズム・パシャの車に出会った学生らは同様に戦争を望んでいることを訴えた。宮殿前には1万人もの学生が集まり、学生らが祖国を敵の攻撃から守るために血を犠牲にすることを述べると、スルタンもオスマン帝国のスルタンであることを誇りに思うと返答した。その後学生らは各国大使館にもデモを行い、イギリス万歳、ルーマニア万歳、忌々しいブルガリア、忌々しい恩知らずのギリシアなどと叫んだ（Aktar 1990 : 86）。

翌日の10月4日には、午前中に現在の政権を維持している自由と連合（以下、自由派）の人々、午後には統一と進歩（以下、統一派）の人々を中心としたデモが行われた（Andonyan 1975：206）。午前中にスルタン・アフメット広場で自由派支持の人々は、政府支持のデモを行い、その後イギリス大使館に行き、バルカン諸国に対してイギリスがオスマン帝国を擁護することを希望すると訴えた（Aktar 1990：87, 108）。イクダム紙やサバーフ紙の論調も、列強がバルカン諸国に圧力をかけ、干渉することを希望していた（Andonyan 1975：207）。

午後からは統一派支持の学生らがデモを行った。スルタン・アフメット広場で開催された大会では、まずタラートが、その後ユスフ・アクチュラがスピーチをした。スピーチの後で、国際的に困難な状況に対して、全てのオスマン人が団結しなければならないことなどを決議した。このデモには、学生や統一派支持の様々な団体が参加していた（Aktar 1990：87, 109－110）¹⁾。デモは宮殿にも向かい、戦争を望んでいることが主張された（Aktar 1990：88）。

10月7日にも学生と統一派支持者とのデモが大宰相府前で行われた。学生の中には、学生の軍隊をつくる必要があると訴える者もいた。しかしモンテネグロとの戦争が差し迫ると、この日の夕方に、ルメリー、イスタンブル州とチャタルジャ県に戒厳令が布かれ、このデモに関係した者は戒厳令法廷に送られた（Aktar 1990：89）。

10月8日にはモンテネグロがオスマン帝国に対して宣戦布告していたが、10月10日に、オーストリア＝ハンガリー、英、仏、露、独のイスタンブル駐在大使は共同通牒で、23条とそれに関係するオスマン帝国の法律を援用して、オスマン帝国ヨーロッパ部の行政改革を迫った（Gooch 1933a：747－748）。同様に13日には、ブルガリア、ギリシア、セルビアのバルカン諸国がオスマン帝国に改革を迫り、行政的自治や選挙による地方議会の開設、教育の自由等を要求した（Gooch 1933b：17－18）。このような列強、バルカン諸国の動きに前後して、オスマン帝国において学生らのデモが行われた。

学生らのデモはベルリン条約23条に、また現在の列強やバルカン諸国による圧力に反対するものであった。自由派支持の人々は問題を外交で解決し大

国の干渉を比較的望んでいたが、統一派を支持する人々はバルカン戦争に好戦的であった (Aktar 1990 : 92, 134)。

これまでの研究ではオスマン帝国は単なる受け身で、戦争に巻き込まれたとするものが多かった。しかし、党派的な違いは若干あるが、学生や民衆のかなりの部分は好戦的雰囲気でも興奮していた。東方問題に象徴された列強の圧力、バルカン諸国の台頭によるオスマン領土の減少、インフレによる社会不安などにより、戦争を不満のはけ口として望んでいた。総力戦となったバルカン戦争であったが、戦争前多くの人々は戦争の激しさをいまだ実感できず、好戦的態度をとった。しかし、身近に戦争を体験し、40万人の難民がアナトリアに向かったことにより、総力戦の厳しさが実感され、バルカン戦争後、詩や物語、絵ハガキなどで悲惨さが伝えられるようになった (Dinç 2008)。

3. 軍の動員

このような状況の中で、オスマン軍は1912年9月22日に準動員体制をしいた。それに対してバルカン同盟側は、オスマン帝国軍の予備役軍が召集されたのを口実に9月30日に動員令を発令した。さらにオスマン帝国は10月1日に総動員令を発令した (GATSEBA5)²⁾。10月5・6日付でナズム陸相からルメリーの東部軍団司令官宛にバルカン諸国が宣戦布告してきそうなので、充分警戒し準備をしておくようにとの命令が下っている (GATSEBA3)。10月8日にはモンテネグロが宣戦布告をしてきたのにもない、スルタンの名で直ちに大使召還をした (GATSEBA4)。10月13日にはブルガリア、セルビア、ギリシアがオスマン帝国に対して共同通牒を突きつけ、17日にはこれら諸国は宣戦布告した。

しかし、オスマン帝国では動員がうまく行われておらず、戦える状態ではなかった (Türkgeldi 1987 : 58)。9月29日付の政府への文書では、兵士は大変疲弊しており、兵器も足りなく、このような状態を脱するのに最低でも5年は必要であると述べられている (Uçarol 1989 : 275)。東部軍団の司令官であるアブドゥラー・パシャはブルガリアとの戦争は避けるべきだと公然

と言っていた (Türkeldi 1987 : 59)。サロニカに駐屯している西部軍団の司令官アリ・ルザからの文書には、西部軍団では4つの方面で戦線が開かれていて、物資や兵員が足りないので補給と援軍の要請を、戦争が開始されたばかりの10月18・19日付で行っている (GATSEBA1)。この点は前章で見た学生らの好戦的な雰囲気とは対照的であり、軍の現実を知っている高級将校らはバルカン戦争に悲観的であり、オスマン軍の敗北がある程度予想されていたのである。

バルカン戦争の緒戦での敗北は、大宰相や陸相ナーズムに強い批判が及んだ。それより以前の7月9日のマフムート・シェヴケット・パシャの陸相辞任によって、参謀の配置換えがあり、ナーズムのもとでは、動員や戦略計画がまだ準備できていなかった (GATSEBA6, Shaw 1976 : 292)。このような配置換えの影響もあって、軍はナーズムのコントロール下ではなく、戦争敗北でさらにナーズムへの圧力が高まった (Swanson 1970 : 179)。

以上見てきたように1912年9月30日にバルカン諸国は動員令を出し、10月8日にモンテネグロが宣戦布告し、第一次バルカン戦争が始まった。列強はオスマン帝国が勝つであろうと予想していた。オスマン帝国にとっては、列強との戦争ではなく、かつてのオスマン帝国領ないし属国であった国々との戦争であるので、オスマン帝国が勝つであろうと内外の人々は考えていた (Ginio 2005 : 169)。しかし現実には、戦争前からオスマン軍の問題点が露呈し、緒戦より敗北を重ねるのであった。

4. オスマン帝国の外交交渉

ロシア外相サゾノフは、もしオスマン帝国がバルカン戦争で勝てば、バルカンにおいてオーストリア＝ハンガリーの干渉がさらに強まるであろうと危惧していた (Dutton 1998 : 18, Miller 1969 : 29, 北島 1975 : 318)。したがって列強は戦争が限定的なものになることを望み、もしオスマン側が勝っても、領土や勢力均衡の変更は認めないとしていた。しかしその後、オスマン帝国の敗北が濃厚となると、列強は領土の変更を認めるようになり、その結果、多くの混乱がもたらされた (Miller 1969 : 48, 56, 北島 1975 : 319,

高橋 1988 : 251 - 252)。

オスマン政府は、10月17日にまずトリポリ戦争で戦っているイタリアと休戦し、外交交渉に長いイギリスとの太いパイプを持つ反・統一派のキヤーミル・パシャを10月29日に大宰相に据えた。これは交渉によって戦争を終わらせる方針を示すものであった。国内では反統一派が勢いを増し、戦況は敗色が濃かった。オスマン軍は早くも11月初旬にはチャタルジャの防衛線まで後退し、8日には統一派の本部のあるサロニカが陥落した (GATSEBA2, 新井 1995 : 121)

キヤーミルは戦争を交渉によって終わらせるため、戦争継続を強硬に迫る統一派を弾圧・逮捕した。列強はオスマン帝国の敗北が明らかになると、国境の変更を認めるようになり、その結果、バルカン諸国の利害が前面に出るようになった。ここにいたって、バルカンにおける勢力均衡が著しく崩れることを懸念した列強の斡旋により休戦が決定し、12月3日にオスマン帝国は休戦案に署名した。

12月17日からロンドンで、イギリス外相エドワード・グレイを中心に、まず列強の駐イギリス大使による会議が始まった。ここでは、セルビアのアドリア海への進出問題、アルバニア独立、エーゲ海の島嶼問題などが話し合われた。アルバニアの国境画定問題ではオーストリア＝ハンガリーとロシアの間で対立があり、結局国境画定によりセルビアのアドリア海への領土拡張は認められず、セルビアは大きな不満を持つこととなり、それが第一次大戦の要因ともなるのであった (Helmreich 1938 : 251 - 252, 255)。

5. 大宰相府襲撃事件の要因

当初、この会議においてオスマン代表団はエディルネ割譲に反対していた。しかしもし戦争が再開すれば、ロシアが中立でいることはありえないため、戦争に勝てる公算はなくなる。したがって列強の意見には従わざるをえなかったオスマン帝国は、1913年1月22日にエディルネをブルガリアに譲ることを受諾した (Helmreich 1938 : 260)。だがエンヴェルら統一派の若手将校は、まだ陥落していないエディルネを割譲するこの内容に強く憤慨し、翌23日に

大宰相府を襲い、大宰相府襲撃事件を起こした³⁾。このクーデターで、陸相のナズムを射殺し、大宰相のチャーミルを辞任させ、後任の大宰相に親統一派のマフムート・シェヴケット・パシヤを充てた。

この事件の背景として、まず国際政治の面では当然、バルカン戦争の影響が考えられる。チャタルジャ防衛線まで後退し、サロニカも落ち、オスマン帝国のかつての首都であったエディルネまで落ちようとしている状況を見て、将校らは強い焦りと不安を隠せなかったのであろう。

将校らの軍指導部、政治指導者への不満は相当なものがあり、これはなんにも統一派のみに限られたわけではなかった。クーデター計画は統一派のみが描いていたわけではなく、政権を担っている自由派も1913年1月25日に大宰相府を襲う計画をしていたと言われている。もし統一派がこれを行っていなかったら、二日後に自由派がクーデターを行っていた可能性も否定できない(Alkan 1992 : 173, Birinci 1990 : 198)。

このことはこの事件の原因を考察する上で重要である。大宰相府襲撃事件は、エンヴェルら統一派の若手将校がバルカン戦争におけるエディルネ割譲に憤慨して起こしたと言われがちである。しかし次に述べるような内外の情勢のほか、統一派の将校だけではなく政治家一般にも、時代の閉塞状況、不安や不満が充満していたことによって起こったのであった。

英国もクーデターがいつ起きてもおかしくないほどのオスマン帝国の危険な状況を感じていた(Turfan 1983 : 472-481)。この英国の外交文書の日付は1912年12月26・27日であり、エディルネ割譲の情報が届く前であることから、統一派の若手将校は、エディルネ割譲のみが理由で突然クーデターをしたのではなく、その他の多くの理由や社会の雰囲気の後押しされながらクーデターを決起したことが解る。

列強は殆どがバルカン同盟側につき、ロシアやフランスは公然とそちらを支持していた(Bayur 1991a : 262-263)。バルカン戦争において、オスマン帝国はヨーロッパ側の領土の80パーセントを失い、400万人ものオスマン国民を失った。このようないわば地政学的な変化が引き金ともなり、クーデターが起こされた(Kayali 1996 : 301)。対外的敗北によって軍のフラストレーションが高まったのである。

統一派をめぐる疎外、分裂状況もクーデターに走らせた大きな要因である。さらに内政を見てみると、政府は弱体であり、スルタンと大宰相の間にも反目も見られた (Bayur 1991a : 262)。また経済状態も非常に悪く、1913年の年間インフレ率は300%にも達し、一般の人々も何らかの変革や不満のはけ口を求めているに違いないであろう (Macfie 1998 : 91)。バルカン戦争開始に熱狂的になった民衆の姿を見ればその一端が理解できる。さらにエディルネを救うためではなく、単に政権を奪取するためにクーデターを起こしたというような見解すら存在するのである (Bayur 1991b : 281)。

このように、広大な帝国が切り取られていくことへの不安やあせり、また様々の不満によりクーデターが行われたのであり、エンヴェルらのイニシアティブばかりを強調する従来の研究を修正する必要がある。

大宰相府襲撃事件の後に、戦闘は再開されたが、結局オスマン帝国は敗北し、5月末にはロンドン条約が結ばれた。同条約でオスマン帝国のバルカンにおける領土は大きく後退した。その後バルカン同盟内で特にセルビア、ギリシア、ブルガリアの三国のマケドニアをめぐる領土要求が重複し、新たな衝突を呼んだ。6月にはセルビアとギリシアはブルガリアに対抗する同盟を結び、さらに両国はモンテネグロ、ルーマニア、オスマン帝国とも結んだ。ブルガリアのセルビアとギリシアに対する敵意は強まり、6月29日にブルガリア軍はマケドニアでセルビアとギリシアの部隊を攻撃し、第二次バルカン戦争が開始された。周囲から攻撃を受けたブルガリアはすぐに敗北し、8月にはブカレスト講和条約が成立した。だがどの国の領土要求もすべて満足のいくものとはならなかった。オスマン帝国は第二次バルカン戦争においてエディルネまで領土を回復したものの、バルカンからの撤退は決定的であった (今井、高橋 1995 : 84 - 85)。

6. バルカン戦争敗北の軍事的要因

このようなバルカン戦争におけるオスマン軍の敗北および弱体化の原因としていくつか考えられる。まず兵隊の数の違いが挙げられる。オスマン軍約29万人に対してバルカン同盟軍は約47万4千人であった (Soyupak 1987 :

159)。オスマン軍の動員令が遅れ、軍の動員が整わないうちに戦争が始まってしまった。予備役軍や郷土防衛軍の中には銃の使い方さえ知らない者がいたとされている（Enginsoy 1989：196）。司令官と将校の対立も生じ、軍の統一も欠きがちであった。その要因として、第二次立憲期における陸軍士官学校出身者と連隊上がりの将校との対立や、高級将校と青年トルコ人革命を担った若手将校との確執が存在した（Alkan 1992：167）。有効な将校団の欠如や、予備役の大隊には二人の将校しか配属されていなかったことなど、軍の機構面での未整備も目立っていた（Helmreich 1938：204）。またオスマン軍は戦争直前におよそ7万5千人の経験のある兵士が退役させられたことも大きく影響している（Türkeldi 1987：57, Uçarol 1989：267）⁴⁾。オスマン軍は兵員数、練度、志気、武器、弾薬、その他多くの点でバルカン軍より劣っていたのである（Soyupak 1987：159）。

軍の弱体化の要因として、オスマン帝国の内政問題も関与している。軍が内政問題に引きずられ、内政の確執が直接軍に影響し、軍の混乱を助長した。第二次立憲期に台頭した若手の将校と、軍人の政治化を望まない高級将校との意見の相違や、統一派と自由派との政治的対立が軍に大きく影響した。また外交的側面として、列強によってオスマン帝国が侵食され、半植民地状況のもと財政的逼迫も大きな要因である。ホールによれば、タンズィマート改革以後、兵士に非イスラーム教徒や非トルコ人がさらに多く入り、命令伝達等における言語問題が生じ、さらには忠誠心の減退も見られた。多民族・多宗教のオスマン帝国は、ナショナリズムにうまく対応できず、近代国民国家型の軍を創設することは困難だった（Hall 2000：18-19）⁵⁾。

このように戦争への世論が高まる中で、軍事的整備は整わないまま、バルカン戦争に突入した。軍や内政においても混乱をきたす中で、総力戦体制を作れなかったのである。

7. バルカン戦争の歴史的意味

軍事史的観点から見てバルカン戦争は大きな画期となった。過去の中世における自国の栄光の歴史やオスマン支配の負の歴史が喧伝され、ナショナリ

ズムに訴えた激烈な戦争となり、民間人への戦争犯罪が増大した。航空機による攻撃が初めて実践で行われるようになり、現在の空爆の歴史の淵源となった。兵站や負傷兵、軍医システムが問題とされるようになり、総力戦となる第一次大戦に教訓をもたらした (Despot 2012 : 182, 191, 252-253)。

バルカン戦争の歴史的意味として、レイマークは第一次大戦が「第三次バルカン戦争」として始まったとして捉え、バルカン戦争とこれに続く第一次大戦を継続したものとしている (Remak 1971)。柴も同様に、「サラエヴォ事件ではじまった第一次大戦は、1912-13年のバルカン戦争の継続としてとらえることができる。史上初めて、世界のすべての地域を巻きこむ世界大戦は、バルカンをめぐる局地戦争として開始された (柴 1997 : 26-27)」と述べている。

バルカン戦争は、独立獲得以降、文化教育政策を含めてナショナリズム的な政策を追求し、領土の拡大を目指して軍備拡張を競ってきたバルカン諸国が、残されたオスマン領土をめぐる争った戦争であった。戦勝国のナショナリズムは高揚し、敗戦国となったブルガリアとオスマン帝国は失った領土を求めることになる。第一次大戦はバルカンの文脈においては、このバルカン戦争の延長線上にあると言えるだろう (木村 1998 : 241)。

近代国際政治の観点では、ヨーロッパのバランス・オブ・パワーや19世紀のヨーロッパの協調を破壊するものであった (Helmreich 1938 : 458)⁶⁾。オスマン帝国にとって、バルカン戦争から続く第一次大戦、トルコ独立戦争は一連のものであり、1912年から1922年までの「10年戦争」であった。これらの戦争は、列強によって領土を蚕食されていく東方問題の結果であり、いわば列強に対する解放戦争、抵抗戦争、反帝国主義戦争という側面も有していた。その一方で、オスマン帝国支配下の地域においては、オスマン中央政府は抑圧の主体であった側面もあった。一連の戦争は、オスマン帝国の政治的・軍事的指導者にとって、帝国の存亡がかかる最後の戦いであった (新井 2001 : 137, Aksakal 2008 : 19, Koroğlu 2007 : 46)。

おわりに

オスマン帝国は、この時期、多くの困難に直面していた。イタリアとのトリポリ戦争、コレラの蔓延、統一派と自由派の対立、軍内部の対立など問題が山積していた（Despot 2012：233）。このような状況の中で、バルカン戦争を迎えたのである。

しかしオスマン帝国は単に客体として応戦したのではなく、党派的な違いはありながらも、時代の閉塞感から好戦的雰囲気包まれていた。統一派を中心とした政治家や若手将校は、バルカン地域での勤務が長く、ナショナリズム台頭に悩まされ、武力を用いての解決に帝国の存亡をかけていた。

一方、オスマン軍の状況は戦争への準備ができておらず、軍内部でも様々な齟齬があった。また混乱する内政の影響も受け、軍内部に色々な亀裂が生じた。オスマン主義を体現し、多民族多宗教の軍が、ナショナリズム萌芽期に適合できず、軍への忠誠心が薄れていき、敗北につながった。オスマン帝国において近代国民国家型の軍を養成することは困難であった。

この時期は自由派の内閣であったが、帝国の旧首都であったエディルネ割譲の知らせを受け、統一派の将校はクーデターを起こし、政権奪取をするが、それには様々な背景があった。クーデターは統一派のみが画策していたのではなく、時代の閉塞感、経済的混乱、ナショナリズムの台頭、ルメリー（ヨーロッパ部）の喪失、難民の流入などの多くの問題により、クーデターの雰囲気醸成されたのである。

バルカン戦争は第一次大戦をもたらし、オスマン及びトルコの「10年戦争」の始まりでもあった。その後、この地域は国民国家体制へ移行し、さらなる問題を抱えるのである。

〈注〉

- 1) ルメリーからの移民団体、トラック・乗合自動車組合、ハスキョイユダヤ人会、税関職員、オスマン商業組合、訴訟代理人会など広範な団体の参加もあった。
- 2) トルコ共和国統合参謀本部軍事史戦略研究文書館の文書の転写については、

(*Askeri Tarih Belgeleri Dergisi*, 1980, 1995) を参照。

- 3) エンヴェルはこの事件の数日前に、もし戦わずしてエディルネを放棄するなら、軍人をやめ、国の救済と尊厳のためには何もかも破壊すると個人的決意を綴っている。(Hanioğlu 1989 : 224) なお大宰相府襲撃事件について詳しくは、(岩木 1999) を参照。
- 4) ただし、退役させられた人数は13万人との説もある。(Alkan 1992 : 167)
- 5) なおこの時期の政軍関係や内政問題について詳しくは、(岩木 2001) を参照。
- 6) オーストリア・ハンガリー帝国のベルヒルト外相は、バルカン戦争が協調外交への幻滅の過程の始まりだとしている。(馬場 2006 : 119-121)

〈参考文献〉

一次史料

トルコ語

- Genelkurmay Askeri Tarih ve Stratejik Etüt Başkanlığı Arşivi, Arşiv nr. 1-A/64, Dolap nr. 303, Göz nr. 4, Klasör nr. 123, Dosya nr. 18 (7), Fihrist nr. 15-12 (GATSEBA1 と略)
- Genelkurmay Askeri Tarih ve Stratejik Etüt Başkanlığı Arşivi, Arşiv nr. 1-A-64, Klasör nr. 125, Dosya nr. 15, Fihrist nr. 12-1 (GATSEBA2 と略)
- Genelkurmay Askeri Tarih ve Stratejik Etüt Başkanlığı Arşivi, Arşiv nr. 4-121, Klasör nr. 308, Dosya nr. 3, Fihrist nr. 1-27 (GATSEBA3 と略)
- Genelkurmay Askeri Tarih ve Stratejik Etüt Başkanlığı Arşivi, Arşiv nr. 4-121, Klasör nr. 309, Dosya nr. 4, Fihrist nr. 3-1 (GATSEBA4 と略)
- Genelkurmay Askeri Tarih ve Stratejik Etüt Başkanlığı Arşivi, Arşiv nr. 4-121, Klasör nr. 309, Dosya nr. 6, Fihrist nr. 4 (GATSEBA5 と略)
- Genelkurmay Askeri Tarih ve Stratejik Etüt Başkanlığı Arşivi, Arşiv nr. 4-7342, Dolap nr. 312, Göz nr. 3, Klasör nr. 650, Dosya nr. 54 (11), Fihrist nr. 3-1 (GATSEBA6 と略)

英語

- Sir Edward Grey to Sir F. Bertie, F. O. 42147/33672/12/44, (No. 496.), Foreign Office, October 9, 1912, G. P. Gooch and Harold Temperley eds., 1933a, *British Documents on the Origins of the War 1898-1914*, Vol. IX, Part I, No. 800, London.
- Sir H. Bax-Ironside to Sir Edward Grey, F. O. 42871/42549/12/44, Tel. (No. 66.) Secret, Sofia, D. October 13, 1912, 1: 50 P. M., G. P. Gooch and Harold Temperley

eds., 1933b, *British Documents on the Origins of the War 1898-1914*, Vol. IX, Part 2, No. 24, London.

研究文献

トルコ語

- Aktar, Yücel, 1990, *İkinci Meşrutiyet Dönemi Öğrenci Olayları (1908-1918)*, İstanbul: İletişim Yayınları.
- Alkan, Ahmet Turan, 1992, *İkinci Meşrutiyet Devrinde Ordu ve Siyaset*, Ankara: Cedit.
- Andonyan, Aram, 1975, *Balkan Harbi Tarihi*, İstanbul: Sander Yayınları.
- Askeri Tarih Belgeleri Dergisi*, 1980, 1995, Ankara: Genelkurmay Basımevi, Yıl 29, sayı 78, 1980, yıl 44, Sayı 99, 1995.
- Bayur, Yusuf Hikmet, 1991a, *Türk İnkılabı Tarihi*, cilt II, kısım II, Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Bayur, Yusuf Hikmet, 1991b, *Türk İnkılabı Tarihi*, Cilt II, Kısım IV, Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Birinci, Ali, 1990, *Hürriyet ve İtilaf Fırkası: II. Meşrutiyet devrinde İttihat ve Terakki'ye karşı çıkanlar*, İstanbul: Dergah Yayınları.
- Dinç, Güney, 2008, *Mehmed Nail Bey'in Derlediği Kartpostallarla Balkan Savaşı (1912-1913)*, Yapı Kredi Yayınları.
- Enginsoy, Cemal, 1989, "Balkan Savaşı (1912-1913) Hakkında Batı Yayın Dünyasındaki Bazı Değerlendirmelerden Örnekler," *Dördüncü Askeri Tarih Semineri Bildiriler*, Ankara: Genelkurmay Basımevi.
- Hanioğlu, Şükrü, 1989, *Kendi Mektuplarında Enver Paşa*, İstanbul: Der Yayınları.
- Türkgeldi, Ali Fuad, 1987, *Görüp İştiklerim*, Ankara: Türk Tarih kurumu Basımevi.
- Uçarol, Rifat, 1989, "Balkan savaşı Öncesinde Terhis Olayı ve Seferberlik İlanı Sorunu," *Dördüncü Askeri Tarih Semineri Bildiriler*, Ankara: Genelkurmay Basımevi.
- Ülman, Haluk, 1984-1985, "Tanzimat'tan Cumhuriyet'e Dış Politika ve Doğu Sorunu," *Tanzimat'tan Cumhuriyet'e Türkiye Ansiklopedisi*, Cilt 1, İstanbul.

英語

- Aksakal, Mustafa, 2008, *The Ottoman Road to War in 1914: The Ottoman Empire*

- and the First World War*, Cambridge University Press.
- Despot, Igor, 2012, *The Balkan Wars in the Eyes of the Warring Parties: Perceptions and Interpretations*, iUniverse.
- Djordjevic, Dimitrije & Fischer-Galati, Stephen, 1981, *The Balkan Revolutionary Tradition*, New York: Columbia University Press. 佐原徹哉訳『バルカン近代史』刀水書房, 1994年。
- Dutton, David, 1998, *The Politics of Diplomacy: Britain and France in the Balkans in the First World War*, London: I. B. Tauris Publishers.
- Ginio, Eyal, 2005, "Mobilizing the Ottoman Nation during the Balkan Wars (1912-1913): Awakening from Ottoman Dream," *War in History*, 12 (2).
- Hall, Richard, 2000, *The Balkan Wars 1912-1913: Prelude to the First World War*, Routledge.
- Helmreich, Ernst Christian, 1938, *The Diplomacy of the Balkan Wars 1912-1913*, Harvard University Press.
- Jelavich, Barbara, 1983, *History of the Balkans: Twentieth Century*, Vol. 2, Cambridge University Press.
- Kayali, Hasan, 1996, "Balkan Wars," *Encyclopedia of the Modern Middle East*, Simon & Schuster Macmillan.
- Kialy, Bela K. and Djordjevic, Dimitrije eds., 1987, *East Central European Society and Balkan Wars*, New York: Columbia University Press.
- Köroğlu, Erol, 2007, *Ottoman Propaganda and Turkish Identity: Literature in Turkey during World War I*, I. B. Tauris & Co Ltd.
- Macfie, A. L., 1998, *The End of the Ottoman Empire 1908-1923*, Longman.
- Miller, James M., 1969, "The Concert of Europe in the First Balkan War 1912-1913," Ph. D. Dissertation, Clark University.
- Remak, Joachim, 1971, "1914-The Third Balkan War: Origins Reconsidered," *Journal of Modern History*, Vol. 43.
- Shaw, Stanford J. and Shaw, Ezel Kural, 1976, *History of the Ottoman Empire and Modern Turkey*, 2 vols., Cambridge.
- Soyupak, Kemal and Kabasakal, Huseyin, 1987, "The Turkish Army in the First Balkan War," Bela K. Kialy and Dimitrije Djordjevic eds., *East Central European Society and Balkan Wars*, New York: Columbia University Press.
- Stavrianos, L. S., 1958, *The Balkans since 1453*, Holt, Rinehart and Winston.
- Swanson, Glen W., 1970, "Mahmud Sevket Pasa and the Defence of the Ottoman Empire: A Study of War and Revolution in the Young Turk Period," Ph. D. dissertation, Indiana University.
- The Other Balkan Wars*, 1993, Washington: Carnegie Endowment for International

Peace.

Turfan, Mehmet Naim, 1983, "The Politics of Military Politics: Political Aspects of Civil-Military Relations in the Ottoman Empire with Special Reference to the "Young Turk" Era," Ph. D. dissertation, London University.

Ünal, Hasan, 1998, "Ottoman Policy during the Bulgarian Independence Crisis, 1908-9: Ottoman Empire and Bulgaria at the Outset of the Young Turk Revolution," *Middle Eastern Studies*, Vol. 34, No. 4.

日本語

新井政美, 1995, 「アフメット・フェリトに関する覚え書き—青年トルコ期における地方分権論的国民主義の可能性をめぐる予備的考察—」『上智アジア学』13号, 上智大学アジア文化研究所。

新井政美, 2001, 『トルコ近現代史 イスラム国家から国民国家へ』みすず書房。

今井淳子, 高橋和, 1995, 「第一次世界大戦前の東欧」百瀬宏コーディネーター『東欧』自由国民社。

入江啓四郎他著, 1964, 『外交史提要』成文堂。

岩木秀樹, 1999, 「20世紀におけるオスマン帝国の政治と軍事—バルカン戦争(1912-1913)と大宰相府襲撃事件を中心として—」『創価大学大学院紀要』20集, 創価大学。

岩木秀樹, 2001, 「オスマン帝国における1912年7月前後の政軍関係—マフムート・シャヴケット・パシヤと統一と進歩委員会との関係を中心に—」『ソシオロジカ』第25巻, 第1・2号, 創価大学社会学会。

北島平一郎, 1975, 『近代外交史』創元社。

木村真, 1998, 「ナショナリズムの展開と第一次世界大戦」柴宜弘編『バルカン史』山川出版社。

柴宜弘, 1996, 『バルカンの民族主義』山川出版社。

柴宜弘他著, 1997, 『世界の歴史26 世界大戦と現代文化の開幕』中央公論社。

高橋昭一, 1988, 『トルコ・ロシア外交史』シルクロード。

馬場優, 2006, 『オーストリア＝ハンガリーとバルカン戦争 第一次世界大戦への道』法政大学出版局。

Domestic Affairs and Military Problems in the Ottoman Empire during the Balkan Wars

IWAKI Hideki

Abstract

The Balkan Wars were a consequence of the Eastern Question as well as a factor of World War I. The Balkans fought alongside each other for the first time, and nationalism increased during this period. The Ottoman Empire experienced defeats from the outset and was unable to construct a modern national military because of confusion and discord.

However, the Ottoman Empire was not a mere victim of Europe, because there was a belligerent atmosphere in the Empire as well. Politicians and young officers in the Committee of Union and Progress, who had worked for a long time in the Balkans, were annoyed by the rise of nationalism there and tried to solve the problem by using military power.

Meanwhile, the Ottoman Empire was unable to prepare for the war because of several obstacles, both inside and outside the military. Confused domestic affairs influenced the military, and various groups vied for control within the military. The multi-ethnic multi-religious military force that had taken shape under Ottomanism was not able to adapt to nationalism.